

2023 年度後期乃木坂スクール#7 (第1回)

受講番号 23B07020

橋詰 舞

### 会いたい人たちのこと、歩いていく先のこと

わたしが大熊由紀子先生のことを知ったのは、遅ればせながらほんとうについて最近のことでした。

今年度、人手が足りないからと、またもや PTA の役員に駆り出された専業主婦のわたしは、PTA 事業のあまりの進まなさに苛立ちを募らせているところでした。人はそれぞれ異なる考えを持つこともわかっているつもりですし、人には人の事情があることもわかっているつもりなのに、さて、どうして人はこうもまとまらないのか、と頭を抱えていたのです。

そんな中、通信大学の課題である「地域福祉論」に着手しました。なるほど、自分がいま体験している PTA のことは、地域福祉の有機的な学びでもあるなと思いました。そして、教科書には有益そうな立派な論が書いてあるというのに、現実がちっともそうではないことに、抱えたくもない怒りがまた沸いて出てくるのです。

それは、具体的な誰かに向けた怒りではなく、いわば「大の大人が何人も集まっておきながら、これっぽっちの問題も解決できないとはどういうことだ」といった怒りでした。そんなに熱心にならなければいい、と自分に何度も言い聞かせました。たかだが PTA なんだから。ひとりでなんか、どうせなにもできないんだから。けれど、どうしても、子どもたちの置かれた状況が気になって仕方がないし、早急に改善したいという思いも抱えていました。

そんなことを年上の友人に相談すると、由紀子先生の『恋するように、ボランティアを』を貸してもらいました。冒頭で、ボランティアの“vol”は、火山、ボルケーノの“vol”という説が紹介され、そのような「ほっとかれへん」といった志を持って、世界をよりよいものにしていかれた方々のお話の数々が、由紀子先生の軽やかな文体で紹介されており、わたしはひどく胸を打たれました。

けれど、どんなことに、どのように心を動かされたのか、わたしははまだ言葉にできません。美しい絵の前にたたずんでいるような心持ちでした。ただただ、わたしは、こういう人たちに出会いたい、と思いました。こういう人たちに出会える場所まで、わたしは自分で歩いていこう、とも思いました。

そういうわけで、由紀子先生の多くを存じあげないまま乃木坂スクールの受講を

決めたわたしは、資料『はじめに』の冒頭に、驚きひっくり返るわけです。

「私が生まれた1940年、女は生まれただけで欠格条項の対象者でした。選挙権も相続権もなかった日本の女性に人権の扉をあけたのは…」教科書で見知っていたことではありましたが、その時代を生きた方のお声から感じられることはあまりにリアルでした。

授業は、インフォームド・コンセントの歴史を皮切りに、人権について考えるものでした。授業の中で特に印象に残ったのは次の一節です。

「アメリカの医師たちが変わったのはなぜ？という貴方の問いにお答えを——医療ジャーナリズムの興隆、消費者運動、公民権運動、女性解放運動の影響、医学教育の改善が原因だとおもいます。フェミニズムも公民権運動も、要するに男や白人や生産者の言いなりにならないという思想。『患者が医療側のいいなりにならない』という態度はこれらと重なりながら発展してきたものです」。

それは、宇宙飛行士にでもなった気分でした。遠く離れたところから、わたしたちの住む時代のこの地球を眺めて、少しずつ、少しずつ、波が覆いかぶさっていくような、時代とは、変化とは、小さなこと、部分のことではないのだ、といった感覚でした。

そして、その変化の波は、つぶさに見れば、ひとりひとりの小さな活動であろうことも。そして、そのような活動が、孤独なものではなく、仲間があれば、波は大きくなっていくのかもしれない、とも。

先日、通信大学のオンラインスクーリングにて、「あなたがたは、社会防衛と人権擁護のあいだに揺れ動く法を前に、精神保健福祉士、あるいはそれを目指すものとして、いったい何をするのか」という大きな問いをいただいたばかりです。

わたしは、それ以前に当事者であるので、人より休みを多く必要としますし、自分のペースを守らないと体調を崩してしまいますので、“弱く、何もできない”といった感覚があります。けれども、それも含めての自分なのだと、不惑になってようやく思えるようになってきました。授業を通して、こんなわたしに何ができるのかを模索する道としたいと考えています。

( 通信大学所属・精神保健福祉専攻)